祇園城跡 IV

国史跡祇園城跡整備事業に伴う発掘調査Ⅰ

小山御殿広場地区整備に伴う発掘調査

2014年
栃木県小山市教育委員会
はじめに

栃木県南部に位置する小山市は、東日本を南北に縦断する国道4号線と北関東の主要道である国道50号線が交わる交通の要衝の地として、さらに新幹線の停車駅として、さらなる発展を続けております。

また、市内中心部を流れる思川は、日光山麓からの清流を集め、渡良瀬川、そして利根川へと合流する大河で、市民の誇れる景観の一つであります。この思川流域には、琵琶塚古墳をはじめ、摩利支天塚古墳、祇園城跡、鹽城跡、乙女不動原瓦窪跡など国史跡が点在しています。思川は、歴史的に見ても重要な役割を果たしてきたといえます。

祇園城跡は、中世この地で活躍した小山氏の居城であります。平成3年の国史跡指定以来、文化庁の指導を得ながら、地元住民の皆様の協力によって指定地の範囲が大きく広がりました。特に市役所北側に大きな広場が確保されたことは、今後のまちづくりに役立つものと信じております。

今回の報告は、市役所北側の「小山御殿広場」と命名された区域の整備事業に先立ち発掘調査であります。本書が城跡の保護と普及に関する資料として、少しでもお役にたてば幸甚と存じます。

なお、事業実施にあたり、懇切なるご指導とご支援をいただきました文化庁、栃木県教育委員会の関係各位の皆様、国史跡祇園城跡整備委員会委員の皆様、また、調査にご協力をいただいた地元の皆様、小山市シルバー人材センターに対しまして、衷心より感謝の意を表するものであります。

平成26年3月

栃木県小山市教育委員会

教育長 津井一郎
例 言

1 本书は、栃木県小山市中央町、本郷町、城山町に所在する国史跡小山氏城跡 赤塚城跡の発掘調査報告書である。

文化財保護法に基づく、史跡現状変更（発掘調査）における文化庁の許可番号は下記のとおりである。

<table>
<thead>
<tr>
<th>No</th>
<th>日付</th>
<th>許可番号</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1</td>
<td>平成17年9月30日付け</td>
<td>17番庁4の987号</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>平成18年10月27日付け</td>
<td>18番庁4の3832号</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>平成21年1月29日付け</td>
<td>20番庁4の1837号</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>平成21年9月25日付け</td>
<td>21番庁4の7070号</td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>平成22年12月24日付け</td>
<td>22番庁4の1841号</td>
</tr>
</tbody>
</table>

2 発掘調査、整理作業、報告書作成は、小山市教育委員会が行い、事業の組織は別に記した。上記の費用はすべて小山市費を含めた。

3 出土品の整理作業及び図版の作成は、秋山隆雄が担当し、小山弘子、重田久子、神保美代子、小林さゆき、田崎はるみ、西川しほこ、橋本裕美子、根本美恵の援助を受けた。

4 発掘調査時の写真及び遺物の写真撮影は、秋山が担当した。

5 本書の執筆は秋山が担当した。

6 遺跡の基準点設置は、三条工機（株）に委託した。

7 遺物の保存処理作業は、東都文化財研究所に委託した。

8 本書に掲載し、発掘調査で得られた資料はすべて小山市教育委員会で保管している。

9 発掘調査の実施並びに報告書作成にあたっては、下記の方々、機関よりご指導・ご教示を賜った。
凡例
1 本書附図中に表したX・Y座標は日本標高地に基づく座標値を表す。測線断面の水準の数値は、海抜値である。方位は、座標北を示す。
2 附図の縮尺は、各図版中に指示した。
3 土器実測図において、素焼きのものは断面を白抜きとした。陶器・磁器については、断面を網掛けで示した。
4 直径、器高、底径はcmを単位とし、( ) 内の数値は推定値である。
色調は、新版「標準土色帖」農林技術会2006年度版を参照した。
残存率は、5％を単位とした。
5 遺構の表記記号は、以下のとおりである。
SE…井戸跡 SD…溝跡・壇跡 SK…土壇
SB…掘立柱建物跡 SX…方形墳穴・不明遺構

目次
はじめに
例言
凡例
第1章 発掘調査の概要 ……………………………………… 1
第1節 発掘調査に至る経過 ………………………………… 1
第2節 調査の方法 …………………………………………… 3
第3節 発掘調査、遺物整理・報告書刊行の組織調査 ………… 4
第4節 調査の経過 …………………………………………… 5
第2章 遺跡の概要 ………………………………………… 7
第1節 鶏塚後の築城城跡 ………………………………… 7
第2節 調査の概要 …………………………………………… 8
第3章 遺構と遺物 ………………………………………… 10
第1節 遺構と遺物 ………………………………………… 10
第4章 調査の成果と問題点 ……………………………… 24
第1節 遺構の変遷 ………………………………………… 24
第2節 小山御殿関連の遺構と遺物 ……………………… 27
第1項 御殿関連の遺物 ………………………………… 29
第2項 御殿関連の遺構 ………………………………… 29
第3節 小山御殿建物の再検討 …………………………… 30
第1項 御殿建物の覆 ………………………………… 30
第2項 覆土層に見る小山御殿建物の構造 ………………… 32
插図目次

第1図 遺跡の位置 ........................................... 2  第12図 H21C調査区 ........................................... 19
第2図 国史跡調査区 ........................................... 6  第13図 H22調査区 ........................................... 20
第3図 郡調査区 ............................................. 9  第14図 H24A調査区 ........................................... 21
第4図 H20・H21A調査区 .................................... 11  第15図 H24B調査区 ........................................... 21
第5図 H20・H21A調査区建物跡 ................................... 12  第16図 H24C調査区 ........................................... 23
第6図 H20・H21A調査区井戸跡 .................................. 13  第17図 遺構の変遷（1） ....................................... 25
第7図 H20・H21A調査区跡跡 .................................. 14  第18図 遺構の変遷（2） ....................................... 26
第8図 H20・H21A調査区第2号井戸跡出土文書 .................. 15  第19図 小山御殿に関連する遺物 ................................ 27
第9図 H21A調査区出土遺物 ................................... 16  第20図 小山御殿東側土塁と推定図 ............................. 29
第10図 H21B調査区 ........................................... 17  第21図 小山御殿主要建物の間取り図 ........................... 30
第11図 H21B調査区出土遺物 ................................... 18  第22図 小山御殿推定位置 ..................................... 33
第12図 H21B調査区東側から .................................. 19  第23図 江戸幕府小山御殿図 ................................. 34

図版目次

図版1 航空写真
  H21A調査区航空写真
図版2 H20調査区
  H21A調査区
  H21A調査区
  H21A調査区第2号井戸跡確認状況
  H21A調査区第3号井戸跡
図版3 H21A調査区 西側から
  H21A調査区 南側から
図版4 H24A調査区
  H24B調査区
  H24C調査区
退構埋め戻し状況
H21A調査区第2号井戸跡出土文書
第1章 発掘調査の概要

第1節 発掘調査に至る経過

祇園城跡は、小山氏の居城として、織緯城跡と共に平成3年3月、国史跡に指定された。平成5年、国史跡指定地や小山氏に関連する城跡の今後の取り扱いの指針を示すため、小山氏城跡保存管理計画を策定した。祇園城跡に関しては、城の領域が広がることが予想されたことから、指定地の拡大を検討する地区が設定された。

市教育委員会では、この指針に基づき、国史跡指定地の県道を隔てた南側の料亭跡地の取り扱いを文化庁・県と協議した。協議の結果、城跡の範囲確認調査を実施することとなり、平成9～12年の3年間、調査を実施したものである。調査では、祇園城に関連する場跡や井戸跡などが検出され、平成14年、国史跡に追加指定された。

また、市では、同年、国史跡祇園城跡の保存と活用をはかるため「小山市国史跡祇園城跡整備委員会」を設置、城門跡地の保存整備事業に着手した。平成16年には、料亭跡地を、「小山御殿広場」と命名、翌17年第1次整備工事を実施した。

一方、城の領域は国道4号線付近まで広がることが確認であったことから、平成17年、同18年、隣接地を追加指定し国史跡の範囲を拡大した。また、市ではこれと併行して国指定地の公有化を進めた結果、平成23年度、小山御殿広場地区の公有化がすべて完了した。

なお、今回実施した発掘調査は、整備事業の基礎資料の収集を目的としたものである。調査にあたっては、文化財保護法の規定に基づき史跡現状変更届を文化庁へ提出し実施した。なお、文化庁の許可番号は下記のとおりである。

記

平成20年度
平成21年1月29日付20委庁財第4の1837号
平成21年度
平成21年9月25日付21委庁財4の7070号
平成22年度
平成22年12月24日付22委庁財4の1641号
平成24年度
平成24年6月15日付24委庁財第4の402号

小山御殿広場
第1図 遺跡の位置
第2節 調査の方法

国史跡祗園城跡は、大きく城山公園地区と県道によって分断された市役所本庁舎北側の小山御殿広場地区に分かれている。発掘調査に先立ち、国史跡範囲を中心に座標軸に沿ったグリッドを設定、史跡地内には既にコンクリート製の測量枠が設置していたことから、これらの枠を基準に現地の測量・遺構実測をおこなった。発掘調査の基準となるグリッドは、12m x 12mで設定、グリッド名は城山公園地区と連番とし、過去の発掘調査と整合がとれるものとした。

史跡整備のための調査は、平成20年（2008）より実施している。調査は、御殿広場地区の東側の平坦部分を中心に実施したものである。平成20年度1地点、平成21年度3地点、平成22年度1ヶ所、平成24年度3ヶ所、調査した。調査区は、それぞれ、H20〜H24調査区とし、調査順にA〜とした。

史跡名称は「小山氏城跡 祇園城」と小山氏関連の中世城郭としての歴史的価値を踏まえての国史跡指定されたものである。城は、廃城後に日光社参のための休泊施設である「小山御殿」が城内に造営されるなど、江戸時代の初めまで稼働していたと考えられ、城の最終は、ほぼこの時期となることが考えられる。この時期の遺構が検出された場合は、その面で掘り込みを確認、遺構の掘削をせず保存することとした。一方、
第 3 節 発掘調査、遺物整理・報告書刊行の組織

小山市教育委員会（平成 15 〜 25 年度）

<table>
<thead>
<tr>
<th>職名</th>
<th>氏名</th>
<th>年度</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>教育長</td>
<td>滝井 悟</td>
<td>(H 15 〜 22)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>酒井一郎</td>
<td>(H 23 〜 25)</td>
</tr>
<tr>
<td>教育次長</td>
<td>山谷新一</td>
<td>(H 15)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>小田部俊夫</td>
<td>(H 16)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>石川直良</td>
<td>(H 19 〜 19)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>水川和男</td>
<td>(H 20 〜 21)</td>
</tr>
<tr>
<td>教育部長</td>
<td>小島武也</td>
<td>(H 22)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>上野安夫</td>
<td>(H 23)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>生賀幸男</td>
<td>(H 24 〜 25)</td>
</tr>
<tr>
<td>文化振興課長</td>
<td>大出恵男</td>
<td>(H 15 〜 17)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>生田目幸雄</td>
<td>(H 18 〜 19)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>小平正美</td>
<td>(H 20 〜 21)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>神長和博</td>
<td>(H 22)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>中村孝太郎</td>
<td>(H 23 〜 25)</td>
</tr>
<tr>
<td>文化財保護係長</td>
<td>鳥海 武</td>
<td>(H 15 〜 16)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>菅間久男</td>
<td>(H 17)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>鈴木一男</td>
<td>(H 18 〜 19 〜 22 〜 24)</td>
</tr>
<tr>
<td>文化財保護係</td>
<td>鈴木一男</td>
<td>(H 15 〜 17)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>秋山晴雄</td>
<td>(H 15 〜 20)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>野口正男</td>
<td>(H 15 〜 19 〜 25)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>増渕昌幸</td>
<td>(H 15 〜 16)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>佐久間弘行</td>
<td>(H 15 〜 17)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>佐山智也</td>
<td>(H 18 〜 19)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>藤資久子</td>
<td>(H 15 〜 16)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>杉原 光</td>
<td>(H 19 〜 21)</td>
</tr>
<tr>
<td>歴史のまちづくり推進係長</td>
<td>鈴木一男</td>
<td>(H 20 〜 21)</td>
</tr>
<tr>
<td>歴史のまちづくり推進係</td>
<td>秋山晴雄</td>
<td>(H 20 〜 21)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>佐山智也</td>
<td>(H 20 〜 21)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>福田定信</td>
<td>(H 22)</td>
</tr>
<tr>
<td>発掘担当</td>
<td>秋山隆雄</td>
<td>(H 23 〜 25)</td>
</tr>
<tr>
<td>発掘担当</td>
<td>秋山隆雄</td>
<td>(H 22)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>藤資久子</td>
<td>(H 23 〜 25)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>杉原 光</td>
<td>(H 22 〜 25)</td>
</tr>
</tbody>
</table>
第4節 調査の経過

平成20年度（2008年度）
平成21年2月 米村泥屋、H20調査区を小山御殿広場南側に設置、表土除去作業を開始する。
3月 南側の調査区から北に向かいトンネルを設定、表土除去作業に入ると。2日 平成20年度の作業を終了する。（27日）

平成21年度（2009年度）
4月 平成21年度のH21A調査区の表土除去作業を開始する。（20日）現場事務所設置、表土除去作業を継続して実施する。下水道や水道管などの地下埋設物のため、作業が難航する。（30日）5月 ベルトコンベア導入、表土除去作業を継続する。（14日）グリッド杭を設置する。確認面は、ローム層及び盛土層となる。（15日）コンクリート杭設置、断面に盛土を確認する。盛土の下層に旧表土面、さらに下層で遺構を確認する。（27日）6月 調査区の北側で防空壕を確認、検出作業に入る。（5日）礫石を調査、H21A調査区を南側に拡張する。（8日）盛土の下層で2つの構築を確認する。（29日）7月 井戸跡（H21ASE2）から木簡が出土する。（7日）調査区をさらに南側に拡張する。国史跡指定城跡整備委員会、発掘調査観察。（13日）礫石の断面実測をする。（15日）井戸跡から出土した木簡を県埋蔵文化財センターに搬入、赤外線写真撮影。（28日）8月 グリッドに基づき調査区を設定（H21B調査区）、表土除去作業に入ると。構築遺跡が多く、作業が難航する。9月 H21調査区航空写真撮影。（28日）10月 現地説明会、30名参加。（3日）H21A・B調査区発掘作業終了、山砂で養生し埋め戻す。（27日～30日）11月 塚山公園地区的調査に入る。平成22年2月 H21C調査区の表土除去作業を開始する。（14日）3月 小山市文化財保護審議会、発掘調査。（1日）調査区を南側に拡張する。礫石の中にコンクリートブロックがあり、層位などから近代の建物跡とする。（2日）調査区東側で遺跡を確認する。（11日）遺構実測完了し、埋め戻す。（23日）

平成22年度（2010年度）
平成23年2月 平成22年度の調査区を限定（H22調査区）、表土除去作業を開始する。（2日）発掘部が断面が多く、作業が難航する。（8日）調査区の南側で土壌を確認する。（14日）東側で確認面が落ち込む。（21日）3月 東日本大震災。発掘調査中に発生、作業員の安全をはかるため、避難する。（11日）調査区を山砂で養生、埋め戻し作業を行う。（18日）機械を撤収、現場作業を終了する。（25日）

平成24年度（2012年度）
7月 調査区を3ヶ所設定、重機を使用し表土除去作業に入ると。（10日）測量作業を開始する。（11日）遺構実測作業。（18日）調査区を山砂で養生、埋め戻し作業を行う。（23日）
第2図 国史跡指定範囲
第2章 遺跡の概要

第1節 廃城後の祇園城

祇園城の歴史については、現在まで刊行している発掘調査報告書や小山市史などに紹介しているので、ここでは、廃城後の祇園城跡について述べることとする。

祇園城は、木本正純が宇都宮軒封後廃城となり、徳川家の日光社参のための休泊施設「小山御殿」が城の南の一画に造営された。小山御殿は、延宝8年（1681）大風によって大破し翌年河原に解体された。城跡を描いた絵図面をみると、曲輪内には有様・周辺といった記述がみられ、廃城後早い段階で荒廃し、平垣部は山林や一部は廃にして利用されていた。一方、思川に沿った小高い部分は、雑木林や竹林となっていた。（註1）

明治時代の測量図「迅速測図」を見ると、祇園城跡内には、小山市街地から栃木・佐野方面へ至る道路が主要道として描かれている。城跡内は道路、城の基底を利用したもので、思川には橋がなく、渡し場があった。現在の黒川公園内の祇園橋が架かる場所である。廃城時には、市役所文化センター南側の道路が栃木・佐野方面への主要道であった。

明治18年（1887）東北本線小山駅が開業となり、駅から栃木・佐野方面に道路が新設される。この道路は、小山駅から西に向かって直線的に敷設され、城跡内を横断したことから、祇園城跡は南北に分断されることになった。思川に観覧橋が架けられ、結城方面から栃木・佐野を結ぶ栃木県南部の主要道となった。市街地には南北方向に日光街道が通り、これに交差するように道路が新設されたことから、小山は交通の要衝として発展し、この2本の道路筋や小山駅を中心に市街地が拡大していくことになる。

祇園城跡の本丸部分には、政治家・星亭（1850〜1901）の別邸が建てられ、多数の石や建築物を配した庭園が造られた。また、道路の両側には、町の有力者である石崎氏の別邸があり、春や秋の牡丹や菊の開花期には一般に開放されていた。明治〜大正時代には、思川の舟遊びが盛況となり、観覧橋や城跡を中心に市民の憩いの場として多くの人で賑わっていたようである。また、城内の星亭の別荘跡には桜が植えられていたこともあり、開花時期には多くの花見客が訪れ、観覧橋が盛況に催されていた。こうした、城の主要な区域は明治〜昭和にいたるまで、人々が集う憩いの場として、民有地のまま大切に守られてきた。

第二次大戦になると、陸軍が駐屯し、城跡内には、曲輪の断面や思川の崖面に防空壕が造られている。また、石崎氏の別荘は、一時中島飛行機が接収したが、戦後、地元の有志が譲渡を受け、昭和21年（1946）「思水荘」として開設した。園内では草花を栽培し、休憩所、運動場、売店などの施設が設けられ、人々の憩安厚生の場として利用されるようになる。

城山公園は、昭和26年（1951）、都市計画決定され公有化の後、昭和32年（1957）から木造のものに整備工事が行なわれた。県道に面したところに、入口が設けられ階段や石垣が設置された。また、曲輪の連続として、祇園橋が架けられた。翌年には、トイレ、アスファルトの敷設、遊具や本丸橋が設置された。こうして、昭和36年（1961）まで、大規模に公園整備工事が実施されている。現在、公園の景観を構成する植栽や遊歩道などはこの時期のものである。

城山公園東側では、昭和28年（1953）から土地区画整理事業が始まり、城跡の遺構の大半が開発された。昭和40年（1965）、国道4号線小山バイパス（現在の国道4号線）が開通した。国道は、市役所付近から、祇園城内を通ってしまったことから、城山公園の東側部分は市街化が急速に進めだ。現在、曲輪などの高まりが残かずであるが観察される。

市教育委員会では、昭和39年（1964）小山市指定文化財第1号として、城山公園部分と民有地の一部を「小山城址」として指定した。高度成長期の土地開発を危惧し、小山氏の居城として、ま
た、市民の誇る歴史学習の場として、その保存と活用を図るものであった。

平成3年（1991）、紙図城跡は、南に位置する鷹谷城跡と共に「小山市城跡 紙図城跡」として、国史跡に指定された。平成5年（1993）、「国史跡小山市城跡保存管理計画」が策定され、城跡と周辺地区の土地の取り扱いについての指針が示された。平成9年からは、思木荘跡地の遺構確認調査を実施し、その後、平成14年（2002）、国史跡指定、さらに東側の区域を拡大し、平成22年度（2010）公有化が終了した。

第2節 調査の概要

国史跡紙図城跡の調査の南に位置する小山御殿広場地区的発掘調査は、紙図城の範囲確認を目的とした調査と、国史跡指定後の史跡整備の事前調査にわけられる。範囲確認調査は、平成16年（2004）以前に実施したもので、既に報告書が刊行されている。（註2）

調査では、溝跡、井戸跡、柱穴などが確認された。それらの遺構は、中世から近世初頭にいたるI～V期にわたる遺構の変遷が考えられている。I・II期は14世紀末、III期は15世紀、IV期は16世紀前半、V期は16世紀後半以降という年代観である。その中でも大きく地形が変化されるのはV期で、北西に残るL字形の溝跡の縮小、周辺の盛土など、現在も観察される遺構である。これらが木工事は、16世紀末の紙図城を攻略した北条氏によっておこなわれた城の大规模な普請と想定されている。

この紙図城の南に位置する曲輪は、西側を急峻な崖、三方に塹を巡らした構造をしており、「小山御殿図」や「小山城絵図」などにも描かれている。江戸時代の始め、徳川幕府によって造営された日光社参のための休泊施設「小山御殿」は、この曲輪内に所在した。「小山御殿」や城の最終段階に関連する遺構と考えられるのは、東側の溝跡や柱穴、井戸跡などである。

この最終面の下層にもこれ以前の多くの遺構が存在している。I～IV期の遺構は盛土や埋立て層の下に確認されている。また、調査区の中央部には、斜面を削り平坦面を造成した面があり、ここでは5期にわたる遺構が重複して調査されている。

I・II期は、溝跡や井戸跡が調査されている。III期には、方形居館が所在する。居館は、二つの曲輪から構成され、西側の曲輪は二重に塹を巡らし、東側の曲輪では、入口部分が想定される。

紙図城の南端に位置するこの調査区では、方形居館から要塞化して城へと変化する紙図城の様子が見えてきた。北に位置する城山公園地区でも、V期の盛土の下層からIII期段階での方形屋根などの遺構が調査されるなど、本調査区と同じような遺構の変遷を見ることができる。

調査した遺構の中で、特に際立っているのが井戸跡の多さである。現在まで確認されている井戸跡は31基でありすべての時期に存在している。ほとんどを掘りの井戸で、大小さまざまな。カタクリの一括出士として、IV期の基準資料としてI trek SE1やⅤ期のⅢ区南SE1、今回調査し未発表を出士したH21A調査区SE2など、紙図城の変遷を知る上で重要な井戸跡となった。

（註1）小山市関係の絵図面、広島中央図書館蔵や三陸図書館蔵を参照
（註2）「小山氏城跡範囲確認調査報告書」紙図城・鷹谷城の調査 平成13年（2013）小山市教育委員会
第3図 国史跡制度の城跡調査区

現状変更（H20〜22・24）
国指定前の調査（H9〜12・16）
第3章 遺構と遺物

H20調査区

調査区の南側に位置する。東西13m、南北15mで設定、調査前は焼や庭として使われていた。
植栽床やゴミ穴が多い。中には、重機によって掘削された掘り込みがありコンクリートブロックや建築廃材が投棄されていた。調査区の北側では、排水溝などが敷設されていった。確認面は、盛土層の上面である。調査は、ゴミ穴などの揺乱部分の検出作業から開始し、その断面で盛土層、旧表土、ローム層の堆積層を調査している。
確認面は、地表下50～60cm、南側の土断面（C-C'）では水平に盛られた埋立て層が確認される。
旧表土は、色は黒褐色で厚く織り、埋立て層と明確に分かれている。調査区の北側のゴミ穴断面を観察される旧表土の標高は35.4m、南側のトレンチ断面では34.2mと比高差が1.2m程あり、この間で傾斜するか階段状となっていることが考えられる。

H21A調査区

H20調査区の北側に設定した。南北26m、東西19m、調査前は住宅となっていた。上部は、建物解体によって瓦片やコンクリート片など建築廃材が散乱していた。こうした表土層を除去後、確認面に掘り込まれた建物の基礎や上下水道といった地下埋設物を撤去し、構造を確認した。調査区の北側には、防空壕が深く掘り込まれている。防空壕はコンクリート製で、平面はL字形をしている。
確認面は、西側がローム層上に、東側が埋立て層となる。ローム層と埋立て層の境界は、中央部で凸曲している。埋立て層は縦状で水平に堆積、丁寧に積まれた様子が観察される。この下層には、旧表土が水平に堆積している。

H21A調査区では、H20調査区から北へトレチャを設定し遺構確認を行った。建物による揺乱が著しい。トレチャでは、埋立て層を断面で確認後、西側へ調査区を拡張した。遺構確認面は、調査区の北東隅で、地面から70cm、西側で60cmほどの深さである。調査では、建物の揺乱著しい東側を掘り下げた。トレチャ内からは、井戸跡2基を調査した。2号井戸跡（SE2）からは木簡が出土している。

井戸跡

調査区内で確認された井戸跡は、12基である。
この内、北側に位置する井戸跡は、井戸枠がコンクリート製で近代のものである。井戸跡とし
たのは、直径1mを超える掘り込みのあるものとしている。SE1～4は、埋立て層を掘り込んでい
ることから、16世紀後半以降に構築されたものである。

第2号井戸跡（SE2）

SE2は、トレハン内に位置し、溝跡や埋立て層を切って構築されている。規模は、1.6m×1.4m、
平面形は溝円形である。土断面を観察すると、小さな礫（3層）が細長く堆積、これは、井戸枠
の裏込みと考えられ、井戸枠があったことが想定される。堆積状況からみると、この井戸跡は
人為的に埋められている。また、湯きり水があり、
この中から木簡が出土している。

第3号井戸跡（SE3）

SE3は、調査区の中央部に位置する。埋立て層を切って構築されている。規模は、2.8m×2.7m、
断面は溝状で、確認面下1.4m付近から径1.1×
1.2mの円形の掘り込みとなる。覆土中から瓦や板縁片が出土している。堆積状況からみると、
この井戸跡は人為的に埋められている。

第4号井戸跡（SE4）

調査区の南側に位置する。埋立て層を切って構築されている。規模は、1.9×1.8m、平面形は
凹形ととなっている。掘り込みは、径1.3mほ
どの円形である。埋没状況は、自然堆積である。

第5号井戸跡（SE5）

調査区の中央、やや西側に位置する。上部を
下水道の集水溝によって埋されている。断面は
溝状で、確認面下1.1m付近から径0.85mの円
形の掘り込みとなる。堆積状況からみると、こ
の井戸跡は人為的に埋められている。
第4図  H20・H21A調査区
第5図 H20・H21A調査区建物跡
第7図 H20・H21A調査区崩壊

第8図 H20・H21A調査区第2号井戸跡出土木簡

第6号井戸跡 (SB6)
調査区の南側、SE4 の北西に位置する。規模は、径1.3mの円形で、堆積状況からみると、この井戸跡は人為的に埋められている。
井戸跡出土遺物
第2号井戸跡出土木簡
井戸跡の湧き水の中から出土している。木簡は、上端付近の左右に切れ込みがある荷札木簡である。縦8.7cm、横2.0cm、厚さ0.1cmを測る。
表に、「西御年貢大豆俵俵」と記す。「欠米」は、欠損した米を補充するものと考えられる。

第1号槽跡 (SD1)
調査区の北側に位置する。西側の調査区から続く槽跡で、調査区内で北側に直角に屈曲し2.5m程でたちあげる。防塩塚によって西側の一部が破られている。上端約2cm、覆土は黒褐色土である。方向は、N-65° Eを示す。柱穴や井戸跡に切られて
第9図 H21A調査区出土遺物

H21A調査区登地出土遺物

H21A調査区表土
第2号溝跡（SD2）

SD2はSD3を切って構築されている。調査区内で完結している。上幅は、推定3.6m、底面の幅1.9m、深さは確認面から約2.4mである。断面は逆合形となる。堆積状況は自然堆積である。方位がSD3と同じであることから、SD3の埋没後、掘り返されたものと考えられる。

第3号溝跡（SD3）

SD3はSD2と同様に、埋立て層下が確認した。南側で立ち上がり、北は延長線上にあるH21B調査区で確認した溝跡になると想定される。SD2に切られているため規模等は不明である。断面は、SD3より0.5mほど深い。埋没状況は自然堆積である。

掘立柱建物跡

調査区内には、多くのピットが調査された。間取りを確認した建物跡は4棟である。平面形は円形を基本とし、柱底の残るピットもある。いずれも、整地層を掘り込んでいることから、16世紀後半以降に構築されたと考えられる。建物間には重複関係も認められることから、何時期かにわたるものと考えている。

第1号建物跡（SB1）

南北棟の建物である。規模は、調査区内で南北15m（7間）、東西5m（2間）、北側は標高差されていることから、さらに北側にのびることが考えられる。方位は、N-10°Eを示す。

第2号建物跡（SB2）

正方形の建物である。規模は、4m（2間）×4m（2間）、方位は、N-15°Eを示す。

第3号建物跡（SB3）

東西棟の建物である。西側は調査区外となる。方位は、東西を基準にすると、N-15°Eを示す。

第4号建物跡（SB4）

東西棟の建物である。西側は調査区外となる。方位は、N-110°Eを示す。

礫石建物

表土除去作業中に扁平で大きめの河原石が検出された。この転石の周りには、整地層が残っていたこともあり、礫石と判断したものである。また、その後新たに2個の転石を確認、その結果、東西方向に3個が直線上に位置している。東側の礫石は、48cm×30cm、厚さ15cmを測る。西側の礫石は、20cm×20cm、間の礫石は、20cm×20cm、厚さ13cmを測る。間隔は、東側の礫石から、4.7m±0.9mである。方位は、N-110°Eを示す。

H21B調査区

23m×2mの範囲をブロックに沿って設定した調査区である。調査前に建物が撤去され、表土中には、建物の基礎や水道管などの地下埋設物が残されていた。確認面は、ローム層上面で、東側に向かって2cm下っている。ローム層下には、鹿沼バシス層が堆積している。層位から見ると、東側のためローム層上面は削られていると考えられる。遺構確認を目的とした調査であることから、ローム層上面まで表土を除去した。

第1号土壌（SK1）

調査区の西側に位置する。礫土が存在していたこともあり、遺構検出を行ったものである。規模は、長軸2m、短軸1.1mを測り、平面形は長方形である。深さ、60cm、埋没状況は、人為的に埋め戻されている。上面に20～30cmの礫が多数検出された。規則性もなく、かつ傾斜が激しいことから、投げ込まれたものと判断される。遺構は、礫礫や陶器綴であり、江戸時代以降のものと考えられる。

井戸跡（SE）

井戸跡は3基確認した。それぞれの規模は西側から、1m×0.9m、2.2m×1.85m、1.9m×1.87mの規模であり、平面形は、楕円形である。

柵列

ピットが直線上に位置することや間隔が不規則であることなどから柵列とした。ピット間の距離は、P1-P2、4.3m、P2-P3、3.8m、P3-P4、2.4m、P4-P5、2mである。方位は、N-80°Eを示す。

溝跡

多くの遺構に切られているため、平面で溝跡が確認される範囲は限られている。溝跡のプラ
第11図 H21B調査区出土遺物

第1表 H21A調査区整地内部出土遺物

<table>
<thead>
<tr>
<th>No.</th>
<th>器種</th>
<th>口径</th>
<th>器高</th>
<th>底径</th>
<th>残存率</th>
<th>色調</th>
<th>出土位置・その他</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1</td>
<td>1642</td>
<td>9.4</td>
<td>2.8</td>
<td>4.5</td>
<td>70</td>
<td>灰白</td>
<td>回転糸切り離し</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>1642</td>
<td>8.4</td>
<td>3.2</td>
<td>3.5</td>
<td>40</td>
<td>灰白</td>
<td>回転糸切り離し</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>1642</td>
<td>9.4</td>
<td>3.2</td>
<td>3.6</td>
<td>40</td>
<td>灰白</td>
<td>回転糸切り離し</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>1642</td>
<td>9.4</td>
<td>3.1</td>
<td>3.8</td>
<td>40</td>
<td>灰白</td>
<td>回転糸切り離し</td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>1642</td>
<td>6.2</td>
<td>2.5</td>
<td>3.3</td>
<td>70</td>
<td>灰白</td>
<td>回転糸切り離し</td>
</tr>
<tr>
<td>6</td>
<td>1642</td>
<td>6.8</td>
<td>2.1</td>
<td>3.2</td>
<td>60</td>
<td>灰白</td>
<td>回転糸切り離し</td>
</tr>
<tr>
<td>7</td>
<td>1642</td>
<td>5.3</td>
<td>1.6</td>
<td>2.7</td>
<td>80</td>
<td>浅黄模</td>
<td>回転糸切り離し</td>
</tr>
<tr>
<td>8</td>
<td>1642</td>
<td>8.8</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>赤灰</td>
<td>常滑産・回転糸切り離し</td>
</tr>
</tbody>
</table>

第2表 H21A調査区表面出土遺物

<table>
<thead>
<tr>
<th>No.</th>
<th>器種</th>
<th>口径</th>
<th>器高</th>
<th>底径</th>
<th>残存率</th>
<th>色調</th>
<th>出土位置・その他</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1</td>
<td>1642</td>
<td>(10.0)</td>
<td>3.4</td>
<td>4.5</td>
<td>40</td>
<td>浅黄模</td>
<td>回転糸切り離し</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>1642</td>
<td>5.5</td>
<td>1.9</td>
<td>3.1</td>
<td>70</td>
<td>浅黄模</td>
<td>回転糸切り離し</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>1642</td>
<td>(6.4)</td>
<td>1.9</td>
<td>3.1</td>
<td>60</td>
<td>灰白</td>
<td>回転糸切り離し</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>1642</td>
<td>(6.2)</td>
<td>2.1</td>
<td>3.1</td>
<td>40</td>
<td>灰白</td>
<td>回転糸切り離し</td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>天目茶碗</td>
<td>(12.5)</td>
<td>4.3</td>
<td>6.6</td>
<td>50</td>
<td>橙</td>
<td>頭 黒色 大窯Ⅱ</td>
</tr>
</tbody>
</table>

第3表 H21B調査区出土遺物

<table>
<thead>
<tr>
<th>No.</th>
<th>器種</th>
<th>口径</th>
<th>器高</th>
<th>底径</th>
<th>残存率</th>
<th>色調</th>
<th>出土位置・その他</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1</td>
<td>1642</td>
<td>9.6</td>
<td>3.3</td>
<td>4.3</td>
<td>70</td>
<td>浅黄模</td>
<td>回転糸切り離し</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>1642</td>
<td>9.6</td>
<td>3.1</td>
<td>(5.5)</td>
<td>50</td>
<td>灰白</td>
<td>回転糸切り離し</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>1642</td>
<td>9.0</td>
<td>2.8</td>
<td>3.9</td>
<td>70</td>
<td>浅黄模</td>
<td>回転糸切り離し</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>1642</td>
<td>7.1</td>
<td>2.1</td>
<td>3.8</td>
<td>80</td>
<td>灰白</td>
<td>回転糸切り離し</td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>1642</td>
<td>5.6</td>
<td>1.6</td>
<td>2.6</td>
<td>50</td>
<td>灰白</td>
<td>回転糸切り離し</td>
</tr>
<tr>
<td>6</td>
<td>碗</td>
<td>(6.8)</td>
<td>3.1</td>
<td>(3.5)</td>
<td>40</td>
<td>灰白</td>
<td>頭 オリーブ黄</td>
</tr>
</tbody>
</table>
表土
1. 石灰土
2. 灰色土
3. 深灰色土
4. 灰色土
5. 灰色土
6. 灰色土
7. 灰色土
8. 灰色土
9. 灰色土
表土及び掘乱層
建物基壇や耕作層
1 明晝灰色土 砂（明晝灰色）+礫（1〜3cm）
2 明晝灰色土 砂（明晝灰色）+礫（1〜3cm）
3 黒褐色土 旧表土ブロック主体土(90%)、ロームブロックわずか
4 褐灰色土 黒色帯ロームブロック多量、鹿沼・ローム粒子微量
5 褐灰色土 主体土(95%)
6 なわび黒色土 ロームブロック主体土、わずかに黒色土ブロック、黑色帯ロームブロック含む
7 墨灰色土 6層より黒色強い、ロームブロック(20%) + 黒色帯ロームブロック
8 墨灰色土 6層より黒色強い、ローム粒子・ブロック、鹿沼ブロック混入
9 墨灰色土 白色粘土ブロック、ローム粒子含む
10 " 砂主体土、ローム粒子多量混入
11 " ローム粒子ブロック状、ローム粒子多量
12 " ローム・鹿沼粒子混入、礫（1cm）微細混入
13 " ローム粒子微細混入
14 " ローム粒子・ブロック少用量
15 " ローム粒子多量混入、粘土粒子少量混入、シルト質
16 " 砂、砂ブロック、礫（5mm）ローム粒子
17 " 16層より赤色強い、砂質、礫（5mm）少量化
18 " 黒褐色土 シルト質、ローム・粘土ブロック、鹿沼粒子含む
19 " シルトブロック含む
20 " ローム粒子多量、粘土粒子少量
21 " ローム粒子少量、礫（5mm）粘土ブロックわずか
22 " 旧表土ブロック
23 " ローム粒子・ロームブロック多量
24 " 硫褐色土 ローム粒子少量、礫（5mm）混入
25 " 21層より黒色強い、礫（5mm）混入、ローム粒子多量
26 " 白色粘土類似
27 " 砂
28 " 硫褐色土 シルト質、硬化
29 " 矽（3〜4cm）混入
30 " にぶい赤褐色土 砂（沈味強い）
31 " 灰白色土 砂
32 " 灰褐色土 砂
33 " 砂+白色粘土

第13図 H22調査区
第14図 H24A 調査区
1 坑  石
2 表土  ローム粒子、ブロック混入、礫（2～3cm）混入

0 2m
A-A'

第15図 H24B 調査区
1 表土
2 灰褐色土  ローム粒子多見、礫（1～2cm）多見
3 2層より色が薄い、鹿沼・ローム粒子混入
4 橙色土  鹿沼ブロック主体、鹿沼粒子多見混入

0 2m
の確認のため、高かであるが遺構面を掘り下げた。北側の断面で掘り込みが確認される。断面形はV字形となり、幅は約4.5m、方向はN-18°-Eを示している。

H21C調査区

調査区の東側に幅2m、長さ20mのトレンチを設定し、調査を行った。調査前は、駐車場として使用され、表土には砕石が10cm程度散乱されていた。表土除去作業を進めながら、遺構を確認した。表土の下には、石炭の焼却灰が厚く堆積している。比較的新しい建物の基壇や地下埋設物は、石炭層を掘り込んでいる。この石炭層の下には、堅く綿まった黑色土があり、この面が大正〜昭和時代の表土面である。調査区の西側では、廃棄物の土層に盛土層が確認される。建物は、石炭層の下の表土面に構築されている。この建物跡を精査するため、調査区を南側へ2m拡張した。

調査区の東側で、堀跡を調査した。堀の断面を見ると、地山はホーム層から粘土層へと移る。なお、建物跡は現状保存し、表土面下の調査は行わなかった。

壇跡

調査区の東側で調査した。調査したのは、壇跡の東側の立ち上がり部分である。断面を見ると、急激に立ち上がる様子が観察される。根の幅については不明であるが、西側で地山層が残っていることから想定すると、西側の立ち上がり部分はおそらく建物の下に位置し、堀の幅は10mを超えないものとなる。断面はV字形であり、深さは不明である。

建物跡

石炭層の下層で調査した。河原石や切り石を使用し塻石としている。当初、小山御殿関連の遺構の可能性もあったことから、調査区を拡張し精査した。調査開始後まもなく、コンクリートやレンガで補強した塻石が調査された。また、トレンチ断面の土層観察の結果から、大正〜昭和時代の建物跡と判断したものである。建物の東側部分には、堅く綿まった硬化面があり土間と使用された部分、さらに横を埋め込んだ便所などが調査された。建物の乗る表土面は、現状の表土面から約80cm下となる。

H22調査区

H21A・H21B調査区の間に設定した調査区である。調査範囲は、東西14.5m、南北9.5mの範囲である。調査前は宅地で、住宅や庭となっていった。植込みやゴミ穴などで墾乱された所があり、確認面は整地層である。遺構はこの面を掘り込んでいる。

表土面は、土壌及び整地層の下に位置する。表土層は、黒色で堅く綿まった。表土面下にはさらに硬化面があり、数数年にわたる土壌造成、あるいは修復作業が行われていたと考えられる。

また、調査区の東側が一層低くなっている。整地面を削って整地作業を行ったものと想定される。

土壌

調査区の南側の壁面を旧表土層まで掘り下げ調査した。整地層の下に黒く堅く綿まった黑色土が堆積し、この面が旧表土層である。旧表土層の標高は、35.1m付近で、ほぼ水平に堆積している。整地のための埋め立て層は、砂・粘土・ホーム土などで、10cm程度の厚さで水平に積まれている。東側には、斜め方向の堆積が観察され、明らかに整地層と分離ができ土壌の状況も異なることから、土壌の基底部としたものである。基底部の幅、6.6mを測る。土壌は、砂や粘土、ホーム土などを使用して構築されている。整地層と比べるとやや粗い印象を受ける。土塙の土塙では、塩の塩塹後、埋め立てられた壷子が観察される。一方、塩塙の東側では、厚い堆積層が観察される。調査された塩塙の基底部は、塩塙の土塙が壊され整地されたことにより、地中に埋没していた部分が残されたものである。断面の観察結果からすると、塩塙構築、壇塙作
養の工程となる。

H24A調査区
H21A調査区の西側に設定した調査区である。図1の5.3m、南北5.5mの範囲で、確認面は、表士から50cm程である。明確な確認面はホーム層である。ホーム土は、黒色帯ホーム土の下層に堆積したものと観察される。上層は、焼入れ作業によって削られたものである。調査区からは、ピットや土壌等を確認した。

H24B調査区
H21B調査区の北に設定した調査区である。図1の2.5m、南北6.4mの範囲である。北側の確認面は鹿沼層、南側がホーム層である。深さは90cm程である。上層は、削平されている。確認された構造は、井戸跡や方形溝等である。

H24C調査区
1区の東側に設定した調査区である。図1の3.6m、南北5mの範囲で確認を確認した。調査区の北側半分が盛土で、南側が埋め立てられている。盛土の一部はトレンチを入れて堆積状況を調査した。盛士の下層にもピットや土壌が確認された。

盛土
盛土は、砂やホーム土・鹿沼土などで水平方向に丁寧に積まれている。層厚は10cm前後、確認された盛士層は、1.1mほどである。表面は堅く、埋立て層と明瞭に識別できる。盛土層の下にはホーム層が水平に堆積している。盛土・ホーム層は東西方向に斜め出し、斜面を形成していた。ほぼこの付近が曲輪の北西コーナーとなる。
第4章 調査の成果と問題点

第1節 遺構の変遷

はじめに

前回までの調査では、遺構の変遷をカワラケの編年を中心に5期に分類した。ここでは、新たな調査の知見を加え、再度築城域の変遷を検討するものとする。（註1）

I・II期（14世紀）

この時期の遺構は、盛土や埋立てされた造成土の下層となることから今回の調査区では、新たな知見はない。しかし、平面的に区画された並行する2条の堀などから想定すると、居館の壇の可能性も考えられる。

III期（15世紀）

堀によって区画された曲輪Ⅰ、曲輪Ⅱが所在している。曲輪Ⅰは、二重の堀によって区画されている。今回の調査では、H21A調査区で曲輪Ⅱの南側を区画する堀の延長部を確認した。この堀時は、北側に屈曲し2メートルほどで立ち上がる。曲輪Ⅱの規模は、東西49メートル、南北60メートルを超える大規模な形状となる。東側コーナーには、幅4メートルの出入口が付く。その東側には、幅3メートルほどの堀跡が南北に位置する。この堀跡は、掘り返しに観察され、新しい堀は、H21A調査区で完成する。H21B調査区で検出した堀跡は、方向・幅とも同じ形状であることから、同一の堀跡と判断される。曲輪Ⅰ内の本時期の遺構については、そのほとんどが、Ⅴ期の盛土層の下となり確認できない。同様に、曲輪Ⅱ内の遺構についても、東側が埋立てて居館の下となる。

IV期（16世紀前半）

今回の調査では、新たな知見はなかった。H21A調査区では、III期の堀跡を切って掘立柱建物跡が確認されていることから、これらの柱穴跡が本期に属することも考えられる。

V期（16世紀後半から17世紀初頭）

V期としたのは、北東や北の堀跡、盛土などの造成工事及びそれ以降の遺構である。現在、観察できる地形はほぼこの時期に形成された。盛土や造成土を掘り込む遺構が調査されている。

今回の調査では、H21A調査区で、埋立てて居館を確認している。埋立ては南北方向におこなわれており、ゴミ穴などの断面で縦状に堆積した造成土が確認されている。また、その下層には、堅く凝った黑色土が水平に堆積している。この層が、旧表土と考えられる。

V期は、2期（1）・（2）に分けられる。戦国時代から江戸時代に至るこの時期は、歴史的にも変動の激しく、紙図域の最終段階で、盛土内、井戸跡のカワラケや標準資料として時期を設定した。

V期（1）は、域の大規模な造成工事、堀の掘削や盛土、曲輪内の埋立てなどおこなわれた時期である。井戸跡や盛土を掘り込む柱穴などである。東側の堀跡は、前回の調査で西側の立ち上がりを確認した。北に延長線上のH21C調査区で東側の立ち上がりを確認した。幅は、10メートルと推定され、ほぼ現在の国道4号線に併行している。

V期（2）とした時期は、紙図域の最終段階である「小山御殿」の遺構を想定されるものである。次節で検討する。

まとめ

域が大きく変化されるのは、III期とした15世紀後期と考えられる。東西幅は100メートルを超える大きな規模の居館と想定され、堀によって区画された2つ上の曲輪から構成される。特に、曲輪Ⅰは二重の堀を廻らせた堅固な構造をしている。曲輪Ⅱより上位の曲輪となっている。曲輪Ⅱでは、東側コーナーに堀が切れた部分があり、出入口と考えられる。曲輪内にも、この段階の遺構の存在が予想される。

次の大きな変化は、16世紀後半と考えられる域の普請工事である。北西のし字形の堀掘削、
I・II期（14C）
主な遺構
- 専政2条
- 井戸跡

III期（15C）
主な遺構
- 構跡

IV期（16C前半）
主な遺構
- 井戸跡
- 方形竪穴

第17図 遺構変遷図（1）
盛土・埋立てなど、城が要塞化した。この時期、祇園城主となった北条氏によって行われたものと想定している。この曲輪を利用して、小山御殿が造営される。

この祇園城の南の一画を占める本調査区域は、居館から要塞化し堅固な城へと変化する。こうした変化は祇園城全体に及んでいたと考えている。

以上、遺構の変遷について述べてきた。本調査区では、Ⅴ期とした盛土や埋立てが行われたため、これ以前の遺構が良好に保存されている。中世の祇園城の姿が、層的に確認される貴重な遺跡と言えるのではないか。

註１ 「小山氏城跡範囲確認調査報告書 I 」小山市教育委員会 小山市文化財調査報告書 第 52 集 平成 13 年（2001）掲載
第2節 小山御殿関連の遺物と遺構
はじめに

祇園城の変遷を5期に時期区分した。前半段階をとる「五期（新）は小山御殿の活動時期である。小山御殿は、德川幕府によって造営された日光社参のための休泊施設である。その造営は、徳川家康の七回忌となる元和8年（1622）と想定されている。その後、古河藩によって天和2年（1682）に、解体されている。活動期間はほぼ60年間である。現在、「江戸幕府小山御殿跡」（以下御殿図）・「小山御殿建具等引渡書」（以下引渡書）などの文献史料によって往時の様子を知ることができる。前回の調査報告書に、推定される所在地や関連する遺構について掲載した。ここでは、御殿の位置について、指標後調査によって新たな得られた資料を加え、絵図面や引渡書を参考にして再度検討するものである。

御殿関連の遺物や遺構を考えると、まず絵図面から御殿を内側、外郭に分け検討するものである。御殿の主要部分は、堀と二重の土塁によって区画されている。将軍の御座所がある部分を内郭、その外側を外郭とする。

第1項 御殿関連の遺物

御殿関連の遺物としたのは、2点である。1は硯である。長さ12cm、幅6.4cm、高さ1.3cm、裏側に銘刻がある。レジリッドから出土している。出土地点は、内郭コーナー付近で、江戸時代中期以降の遺物ともに調査されている。小山御殿には、御殿が面され、御殿の解体時には、土橋兵右衛門、久兵衛が行っていた。土橋銘の銘刻があることから、御殿関連の遺物とした。2は内郭の中央部に位置するII2A調査区SE2から調査された木簡である。縦9.7cm、横2cm。16世紀後半の造営された盛土を切って構築された井戸跡であることや、年貢として納められた大豆、欠米などの表記で17世紀代の木簡と考えられ、御殿の稲倉期と重なる。

第2項 御殿関連の遺構

堀跡

御殿の外郭の堀は、三方にめぐる。F・Gトレントで南北方向の堀跡を調査しており、絵図面に

第19図 小山御殿関連遺物
内郭土塁

地表面では土塁状の遺構は観察されない。H22調査区で、斜め方向の堆積層を調査、南側のDトレンチでも同様の堆積層が確認されていることから、土塁の基底部とした。H22調査区南側の土層断面（A-A'）では、旧表土（16世紀後半）に土塁が築かれている。幅6.5m、砂、礫、ローム土などを交互に積み重ねている。両側には、水平に薄く堆積した層が観察された。丁寧に盛土された造成土と考えられ、土塁の構築後、土塁を敷いたと想定される。Dトレンチでは、基底部の幅は約8mとなる。側面部分もH22調査区と同様に水平に堆積する造成土を確認した。おそらく内郭は外郭より高くなっていたと考えられる。土塁の内側に土塁が盛られたことから、地表面に現れる土塁幅は、土層断面で観察された長さより小さくなる。おそらく地表面でも幅3間（5.4m）程度の規模が推定される。

内郭北西のコーナー部分は、H24C調査区で東西の削り出し部分を調査、前回の調査で北方向削り出しを調査していることから、北西コーナーの位置は確認できたと考えている。

建物跡・井戸跡

御殿に関係する遺構と考えられるのは、H21A調査区の礫置や井戸跡などである。この頃において、建物跡の復元と推定地について検討する。
第20図 小山御殿東側土塁推定図
第3節 御殿建物の再検討

はじめに

調査では礫石や井戸跡などが調査され、御殿関係の遺構とされた。前述書によると建物が解体され、建物や建具類の他、多数の瓦が持ち出されている。調査前、礫石などから建物に関連する遺構は大部分失われていることは予想されていた。ただし、掘り込みの深い井戸や造旋面などは埋没している可能性があった。

ここでは、建物の構造を再度検討した上で、調査した遺構について考察することにする。主要な建物については、前回報告した。主要建物は4棟である。検討するにあたり、参考としたのは、前述書に記載された建物の全状の枚数である。前述書は、御殿書の水職兵士衛門・久兵衛が古河藩に提出したもので、信頼性が高ないと考えられる。

第1項 御殿建物の全状

前述書に記載された全状は下記のとおりである。

記

『小山御殿建具類引渡書留』

御殿御殿建具類書留

御殿御家間数之覚

一 御殿より 七間、横六間半 こけらふき屋根

一 御殿より 武間半、横武間 同 屋根

一 御殿より 五間、横三間 同 屋根

一 御殿御殿 但御殿蔵ともに九拾畳
（良下、以下同様）

一 御殿より 八間、横八間 こけらふき

一 御殿より 七間、横六間 こけらふき

一 御殿より 三間

一 御殿より 七間、横三間 こけらふき

一 中略

一 御殿御殿 但し半畳共に四拾畳

一 御殿より 八間、横八間 板戸戸見

一 御殿御殿御御休所より 四間、横三間 かや

ふき屋根

一 中略

一 御殿、内御良下、御殿等共二式拾八畳

一 良下より 武間、横老間 かやふき屋根

一 御殿御御休所より 四間、横三間半 か

やふき屋根

一中略

一 内二間御休所御等共に三十畳

一 良下より 横老間 こけらふき屋根

一 御殿より 拾間、横武間半 からふき

屋根

一中略

一 御殿御殿 五拾畳

一 玄間より 三間半、横老間半 こけらふき

屋根

一 御殿御殿 拾間、横武間半 かやふき屋根

一 御殿御殿 八拾畳、内半畳共二

一中略

一 御殿御殿 二間半、横老間 板ふき屋根

一 御殿御殿 七畳

一 良下より 四間、横武間 かやふき屋根

一 御殿御殿 五拾畳

一 良下より 五間、横武間 かやふき屋根

一 御殿御殿 武拾畳

一 御殿御殿 北東七間半老間半

一 御殿御殿 北東武拾畳拾畳

一中略

一 御殿御庭之前屏、湯殿より南角拾拾畳間老半、南之方拾三間、東之方拾七間半

一 御殿御殿南角より御休息之壁迄拾間

一 御殿御殿之前の屏、東拾間二尺、南之方三間

一 右御殿和て百拾六畳、内半畳共二、内こや

一拾共二、右御殿和四百拾六畳、此内拾畳雨ひるい

たし腐申候

一略
<table>
<thead>
<tr>
<th>No.</th>
<th>名称</th>
<th>規模</th>
<th>間</th>
<th>屋根</th>
<th>量数</th>
<th>備考</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>①</td>
<td>湯殿</td>
<td>2.5</td>
<td>横</td>
<td>2</td>
<td>柚茸</td>
<td>90</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>雪殿</td>
<td>1.5</td>
<td>横</td>
<td>1</td>
<td>柚茸</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>②</td>
<td>阪下</td>
<td>1.5</td>
<td>横</td>
<td>2</td>
<td>柚茸</td>
<td>3</td>
</tr>
<tr>
<td>③</td>
<td>膳立</td>
<td>7</td>
<td>横</td>
<td>3</td>
<td>芒葺</td>
<td>40</td>
</tr>
<tr>
<td>a</td>
<td>阪下</td>
<td>1.5</td>
<td>横</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>④</td>
<td>老中休息所</td>
<td>4</td>
<td>横</td>
<td>3</td>
<td>芒葺</td>
<td>28部下、雪隠含む</td>
</tr>
<tr>
<td>b</td>
<td>阪下</td>
<td>2</td>
<td>横</td>
<td>1</td>
<td>芒葺</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>⑤</td>
<td>老中休息所</td>
<td>4</td>
<td>横</td>
<td>3.5</td>
<td>芒葺</td>
<td>60二間</td>
</tr>
<tr>
<td>c</td>
<td>阪下</td>
<td>横</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td>柚茸</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>⑥</td>
<td>広間</td>
<td>10</td>
<td>横</td>
<td>2.5</td>
<td>芒葺</td>
<td>50</td>
</tr>
<tr>
<td>d</td>
<td>女間</td>
<td>3</td>
<td>横</td>
<td>1.5</td>
<td>柚葺</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>⑦</td>
<td>台所</td>
<td>19</td>
<td>横</td>
<td>2.5</td>
<td>芒葺</td>
<td>81</td>
</tr>
<tr>
<td>⑧</td>
<td>阪下</td>
<td>3.5</td>
<td>横</td>
<td>1</td>
<td>板葺</td>
<td>7</td>
</tr>
<tr>
<td>⑨</td>
<td>阪下</td>
<td>4</td>
<td>横</td>
<td>2</td>
<td>芒葺</td>
<td>16</td>
</tr>
<tr>
<td>⑩</td>
<td>阪下</td>
<td>5</td>
<td>横</td>
<td>2</td>
<td>芒葺</td>
<td>20</td>
</tr>
<tr>
<td>⑪</td>
<td>広間</td>
<td>7</td>
<td>横</td>
<td>1.5</td>
<td>芒葺</td>
<td>21北東</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>合計</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>416</td>
</tr>
</tbody>
</table>

以上、別表を参考にしていただきたい。

第2項　畳から見る御殿建物の間取り

次に引渡書に記載された畳の総数416畳を各部屋ごとに配し、建物の間取りを検討することにする。

①　は、将軍の御御屋で、「御殿」、「御次」「御三ノ間」、「納戸」の4間である。規模は、7間×横6間半、柚葺き屋根の建物で、畳の総数90畳として湯殿や雪隠の畳を含んでいる。湯殿、雪隠はその大きさが記されており、御殿絵図によると、御屋所の西側に湯殿があることから、復元図では湯殿と雪隠に畳3畳を配し、雪隠を湯殿の北側に設けた。
② は、廊下で 1 間半 × 横 2 間、桁葺きの建物で 3 層、「寄立」とつなぐものである。
③ は、寄立もあり、御殿絵図では、「御寄立」・「御料理ノ間」とされる建物で、7 間 × 横 3 間、40 塁数である。2 塁は板の間とした。
④ は、老中住所で、北西の建物で、規模は 4 間 × 3 間、桁葺き屋根の建物である。御殿絵図では、「御老中様」・「御休暇間」とある。引渡書では、総畳数 28 塁、廊下、雪隠きを含むことから、復元図では、廊下に 3 塁、雪隠きに 1 塁を配した。
⑤ も老中住所である。4 間 × 横 3 間半の規模である。引渡書では、二間、畳数が共に 30 塁と記されている。建物を 8 間 × 3 間半とし、28 塁数の部屋を二間、残る 4 塁を廊下に配した。御殿絵図における「御老中様御寄合所」・「御広間」に当たった。
⑥ は広間である。10 間 × 横 2 間半の規模である。
御殿絵図に記載された「御寄付ノ間」とした。
⑦ は台所である。19 間 × 横 2 間半の細長い規模の建物である。御殿絵図にみる「御膳料理間」・「御台所」・「御料理ノ間」、建物の北に位置する。
⑧・⑨・⑩ は廊下である。御殿絵図では、玄関から入り北の台所に連結する廊下が 3 塁所描かれている。3 塁所の廊下を西から配した。
⑪ は広間である。7 間 × 横 1.5 間の規模である。御殿絵図と対照しても該当させるような広間は見当たらない。引渡書には、北東との記載があり、台所の東に細長く広間を配した。
以上、畳の枚数から推定した建物が第 21 図である。建物を組む扉の規模が引渡書に記載されている。扉は、建物の南側と西側に設いている。引渡書の数値で扉を巡らし、その他の扉と扉所の位置は、御殿絵図から判断したものである。
第22図 小山御殿推定位置
図版
H21A 調査区第2号井戸跡出土木簡
<table>
<thead>
<tr>
<th>所有遺跡名</th>
<th>事略</th>
<th>所在地</th>
<th>コード</th>
<th>北緯</th>
<th>東経</th>
<th>調査期間</th>
<th>調査面積</th>
<th>調査原因</th>
</tr>
</thead>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>所有遺跡名</th>
<th>種別</th>
<th>主な時代</th>
<th>主な遺構</th>
<th>出土遺物</th>
<th>特記事項</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>祇園城跡</td>
<td>城跡</td>
<td>墳塚</td>
<td>鐵器・白磁</td>
<td>青磁・白磁</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>銅鏡</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>陶磁器</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>カララガ</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>木簡</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

国史跡整備のための事前調査であり、祇園城の変遷の様子が確認された。また、徳川幕府によって造営された「小山御殿」に関連する遺構が調査された。
祇園城趾IV

gokurisokusou IV

国史跡祇園城趾整備に伴う発掘調査 I
小山御隷広場の発掘調査

平成26年3月24日印刷
平成26年3月28日発行
発行／栃木県小山市教育委員会
〒323－8686 小山市中央町1丁目1番1号
電話 0285（22）9669
印刷／株式会社ダイサン小山